
光と風の輪舞曲 ロンド

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と風の輪舞曲 ロンド

【Nコード】

N8949P

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

両親の離婚、母親からのDVによって心を閉ざしてしまった少年、大河希望^{タイガノシミ}。そのため周囲からは繰り返し執拗ないじめを受けていた。しかし転校先の学校での出会いによって、彼の人生が変わっていく。

一人の少年の心の成長を描く、短編現代ファンタジーです。ケータイ小説の書き方をしておりますので、ご了承ください。

1 風のエチュード

永遠に続く闇はない。

何かに躓いて倒れても、埃を払って立ち上がればいい。

自分は決して一人ではない。

信じよう。

未来を。

自分の可能性を。

眼下に広がる雲海の下には、あふれる光と優しい風が吹いているから。

緑が丘ニュータウンは新興住宅地として日々その姿を変えている。

山は削られ森が消え、幾何学的な道路が人の手によって描かれていく。

「まるで前歯の欠けた子どもみたいだな」

学校への坂道を下りながら、大河^{タイガノッソミ}希望はため息をつく。

できたての新しい家と何も建てられていない更地。
人工的な街路樹。

まだ残暑の残る9月、近くの小学校へ向かう黄色いランドセルの集団が過ぎ行く夏を追いかけるように走っていく。

道ばたに咲くタンポポ。

風にゆれる銀杏の葉。

どれも珍しいものではない。

ただ、彼にとっては何でもよかったのだ。

何かに気持ちを逸らせ、学校への道のりが少しでも遠くなればいい。

緑が丘中学校2年3組。

それが希望の新しい学級だった。

夏休みボケも落ち着き始めた9月半ばの転入生に、期待を持って迎えらるるのはきつと最初の数日だろう。

どうせまた始まる。

希望にとって学校は家庭と同じくらい苦痛を伴う場所だった。

それでも家で気を遣ってじっとしているよりはいい。

叔父さんたちも不登校生徒の保護者という立場では、世間体が悪いだろう。

養ってもらった立場の自分としては、少しでも“いい子”でいなければならぬ。

それが自分を少しでも生き長らえさせてくれる。

何度死のうと思ったことだろう。

希望は興味本位でまわりついてくる級友たちに、曖昧な返事を返しながらこつそりとため息をつく。

学校という檻の中でも、一番嫌いなのは休憩時間。

生徒たちが野放しになる時間だ。

「ねえ、東京のどこに住んでたの？」

「部活なんかやってた？」

「好きな教科なに？」

“大河希望です、よろしくお願いします”だけの挨拶だったため、ここぞとばかりに寄ってくる顔、顔、顔。

曖昧に笑い、しどろもどろに答えても、彼らにはそれが“迷惑”だと気づくことはない。

彼らは“好意”のつもりで話しかけているのだ。

“好意”“興味”そういったものは希望にとっては“迷惑”という意味にしかないというのに。

「ねえノゾミって何か女の子みたいな名前だね？」

とうとう言われた。

きっと彼は僕をリラックスさせたいがために言ったのだろう。

彼の思惑では「そう？ えへへ」と僕が笑い、みんなで声を合わせて笑う。

そしてその雰囲気を作った功労者として自分の株を上げる。

そんなところだろう。

でも僕は卑屈に笑うしかできない。

どう返せばこの雰囲気を崩さないか、わかっていたとしても。

案の定、一週間も過ぎると僕は漫然とした日常の中に埋没していった。

クラスの人たちや先生たちの名前も全然覚えていない。

覚える気もない。

表面上だけの友人関係。

職務上の優しさ。

そんなもので何かが変わったことはない。

変わることを期待したりもしない。

願わくは構わないでほしい。

僕は道端の石ころや、乾けば消えてしまう雨上がりの水溜まりになりたい。

この世の中の隅っこでひっそりと生きていければ、それでいい。

何も望まない。

ただ、それだけでいいんだ。

けれども世の中は、そんな僕の細やかな望みさえ許してくれない。

彼らは異質なものを認めようとはしない。

「あいつってなんかキモくない？」

「暗いよね」

ほらやっぱじ。

明るく元気に笑顔を作れる生活を送ってきたヤツらには理解できないんだ。

笑いたくても笑えないヤツがいるってことを。

そして笑えないヤツは異質なヤツということになり、ヤツらは排除しようとしてくる。

まずは言葉と視線の暴力で。

休み時間にだれも来なくなり、席替えや授業での班編成で嫌がられる。

体育の時間、人数にあぶれる。

廊下を歩いている時、すれ違うヤツがニヤニヤ笑って振り返ったり、ヒソヒソ話を始める。

今までの僕を取り巻く当たり前の光景。

どこに行ってもそれは変わらない“日常”の姿。

そして僕はまた学校というものに苦痛を感じることになる。

10月半ばの放課後、下校しようとした僕の下足箱からは靴がなくなっていた。

「ふっ……」

僕はため息をついて近くのゴミ箱を覗き込む。

ソックスを通して伝わるリノリウムの床の冷たさが情けない。

ゴミ箱に靴はなかった。

「ん〜と……」

少し考えた後、外に出て側溝を覗き込む。

見える範囲には茶色い枯れ草が少し積もっているだけで、白い学校指定靴らしき物はない。

念のためコンクリートブロックで蓋をされているところも覗き込むが、やはりない。

「ちっ、手が込んでるな」

手についた砂を払って立ち上がると、背後に人の気配がする。

振り返ると見たことのない女子が僕を見て立っている。

「これ、あなたのじゃない？」

突き出された右手には僕の靴。

名前は書いていないが、買ったばかりの新しいその靴は間違いなく僕のだった。

「う、うん……」

僕はうなずいて受け取ろうとする。

すると伸ばされた僕の手から靴がすり抜けてしまう。

その女子が靴を持ち上げたのだ。

「お礼」

「えっ？」

「お礼よ。見つけてあげたんだから、ちゃんとお礼言わなきゃだめでしょ？」

女子生徒は大きくきれいな目で、いたずらっ子のように微笑んで僕を見つめている。

「あ、う、うん。ありがとう……」

我ながら情けないが、最後の方はたぶん風に吹かれて彼女まで届かなかっただろう。

自慢じゃないが声の小ささには自信がある。

卑屈な態度にも。

「聞こえない」

女子生徒はクスクス笑いながら、僕の手には靴を渡してくれる。

新手のいじめかとも思ったが、その女子生徒からいじめのオーラは出ていなかった。

「帰るの?」

僕はうつむいたまま頷いて、その場で靴を履く。足裏についた砂がじやりじやりする。

「家どこ?」

「ニュータウン」

この辺でニュータウンといえば、緑が丘ニュータウンのことを指す。学校の周囲は緑町といって、昔は武家屋敷があったくらい古い町だ。山を削ってできたニュータウンと歴史のある緑町ではいろいろと摩擦も起きているらしい。

僕にはまったく関係なかったが。

「じゃ途中でいっしょに帰ろうか」

とほとほと歩き出した僕の横にその子が並ぶ。

ネームプレートには『桜木風花』と書いてあり、その下の青いライオンは同じ2年生のカラーだ。

「なに？ ああ、あたしの名前？」

女の子は胸を突き出すようにしてネームプレートを指さす。

心持ち盛り上がった年相応の胸が目に入り、希望は一瞬のうちに赤面してしまふ。

「あたし『さくらぎ ふうか』、1組。きみは？」

「ぼ、僕は…… 大河希望…… です」

急いで目を逸らせて自分のつま先を見ると、視界に紺のスカートが入ってくる。

「わー！」

立ち止まると風花と名乗った女の子は真正面から、不思議そうな目でネームプレートを覗き込んでいる。

「希望って書いてノゾミっていうんだ」

次に続く言葉はわかりきっている。

『女の子みたいだね』って。

きつとそう続く。

けれど彼女の口から出た言葉は希望の予想外の言葉だった。

「いい名前だね」

くるりと振り返った紺のスカートが広がって、円盤を作り出す。

秋風に吹かれた風花の長いツインテールが、左右に揺れながら離れていく。

希望は追い風に背中を押されて、一歩踏み出した。

2 風のカツオーネ

翌朝上履きは無事だったが、僕のお尻は無事ではなかった。

椅子の上に画鋲が貼り付けてあったのだ。

ご丁寧に粘着テープで針を上向きにして。

上履きが無事だったので安心して気を抜いたのがよくなかった。

僕はその上に思い切り座ってしまった。

「く……う……」

大きな声を上げて痛がれば思いつほど。

僕は必死に痛みをこらえ、机に肘をつけて立ち上がる。

朝の学活が始まるまでまだ時間がある。

僕は保健室に行って絆創膏をもらうことにする。

歩くとお尻の傷がじくじくと痛む。

場所が場所だけにおおっぴらに押さえることもできず、僕は傷口に振動を与えないようにそろそろと歩く。

廊下の壁にもたれかかるようにそろそろと歩く僕の姿を、すれ違う生徒たちはみな変な目で見ながら避けていく。

保健室にはだれもいなかったが、鍵は開いていた。

きつと保健委員が健康観察カードを各クラスに配るために開けたんだらう。

「失礼しまあす」

そろそろとドアを開けると、薄暗い室内は冷えた空気が沈殿している。

僕は勝手のわからない保健室の真ん中で呆然とする。

絆創膏はどこにあるんだらう。

「おっはようございま〜す!」

僕はびくつと飛び跳ねてしまう。

元気よく保健室のドアを開けて入って来たのは、桜木風花だった。

「あれ〜? 希望くんどうしたの?」

桜木さんは大きな目をくりくりさせて、近づいてくる。

これも自慢ではないが、女の子と二人で話をするなんて、昨日の放課後が生まれて初めてだ。

誰もいない室内で女の子と二人きりなんて、僕にはとうてい耐えられるものじゃない。

「え、あ、いや……」

例のごとくしどろもどろで答えると、桜木さんはスタスタと先生の机に近づいていく。

机上にある木製の箱を開けると、中から絆創膏を1枚取り出す。

「はい」

にっこり笑ってそれを僕に差し出す。

「え、あ、あ…… ありがとう…… じゃね」

「バンソコ見つけてあげたお礼にちょっと手伝ってくれない？」

桜木さんは僕のしどろもどろを途中でばっさりぶった切ると、僕の

手にA3サイズの健康観察カードをどさっと乗せる。

「う、あっ」

僕はいきなり渡されたものだから、落としそうになってふらふらしてしまふ。

「あたし後期保健委員になっちゃったんだ。今週健康観察カード配りだから面倒臭くって」

そう言いながら桜木さんは健康観察カードの残りを抱えてさっさと保健室を出て行ってしまふ。

「え、あ、ちょ、ちょ…… っと……」

お尻の痛みも気になったが、なぜ彼女は僕が絆創膏を探しに来たってわかったんだ？

それを聞いたかったけど、もう彼女の姿は廊下から消えていた。

「はぁぁ……」

僕は深くため息をつく、表紙に書いているクラスへ配りに行った。

健康観察カードを配り終わって、トイレの個室に入る。

ズボンとパンツを脱いで絆創膏を貼る。

思ったより血は出ていなくて、ほっとする。

個室から出ると数名の男子生徒が用を足している。

僕は目を合わせないようにしてトイレから出る。

いつからなんだろう。

他人の視線を避けるようになったのは。

他人の視線に痛みを感じるようになったのは。

『お母さんやめてよ！』

『いいからじっとしてなさい！』

『やだあ！ 痛いよ！ お母さん！ 痛いよお！』

『ごめんね希望。ごめんね？ 痛かったですよ？』

僕を傷つけて泣きながら謝る母。

怪我が治るとまた傷つけられる。

だから以前僕はいつも絆創膏や包帯を持ち歩いていた。

怪我が治るともっとひどい傷をつけられてしまうから。

お母さんはじっと僕を見つめていた。

『あなた本当に怪我治ってないの？』

『もう治った？』

母の視線はいつも僕を傷つける。

僕は母の視線から逃げる。ああそうか。

あの頃からかな……

絆創膏をもらったことを出勤してきた保健の先生へ告げて教室へ戻ると、1枚のルーズリーフが机の上に乗っている。

【う　こして手を洗わないヤツ最低】

【うん　マン参上！】

そうくるか。

僕は無言で紙を丸め、ゴミ箱へ捨てる。

椅子の上からはもう、画鋏はなくなっていた。

椅子に座って文庫本を取り出すと、教室のざわめきの中からいくつかの言葉が漏れ聞こえてくる。

「汚ねえよな」

「やべえよ、俺あいつの席の後ろじゃん。んこ臭えし」

「てかプリントどうすんだよ」

「うわっやべえ、伝染るじゃん」

今朝の出来事はまた恰好のネタを提供してしまったようだ。

その日からはそのネタでいじめられるようになった。

プリントは受け取ってもらえず、僕が何か触ると大騒ぎ。

技術の授業で木工があった時など、僕の使った道具はだれも触ろうとはしなかった。

「はあぁ……」

今日も学校が終わった。

帰りの学活が終わり、鞆を背負って帰ろうとすると横から強い力で押されて倒れてしまう。

「あっ！」

僕はその拍子に椅子と机ごと倒れてしまい、隣の席の女子にぶつかってしまう。

「きゃあ！」

その女子は僕に押されて倒れ込む。

「うわゝ希望に触られた！」

「大丈夫？」

机や鞆の中身を床にぶちまけて倒れている僕にはだれも見向きもしない。

僕にぶつかられた女子は泣き出し、その子を支えて立たせた女子にすごい目で睨まれる。

「う、ごめん……」

僕が謝るとその子の友人らしい女子は、汚いものでも見るような目でその子をささっと離す。

「あゝあ、泣かしちゃった。お前謝れよ」

たぶん意図的に僕にぶつかってきた男子が、僕を見下ろしてにやんでいる。

周囲には同じグループらしい男子生徒が数名並んでいる。

「う、ごめんなさい……」

僕は再度その子に頭を下げ、床に散らばったノートや筆記用具を集め始める。

すると突然その手を踏まれる。

「っっっ！」

ぎりぎりと踏みにじりながら、体重をかけてくる。

握りしめたシャープペンシルが指に食い込む。

「何だよその謝り方はよ？ 心がこもってねえなあ！」

「その子はおめえにうご臭つけられたんだぜ？」

「一生消えねえ心の傷を負っちゃまったんだぞ？」

腰を足蹴にされ僕は仰向けに転がってしまふ。すると腹を踏みつけられる。

「死んで詫びろよ」

別の男子が僕の首を踏む。

僕は苦しくなって両手でその足をどかそうとする。

「ああっ！ 触んじゃねえよ！ んこマンがよー！」

喉を踏んでいた男子が今度は僕の額を踏みつける。

大きな音がして僕の後頭部が床にぶつかる。

僕の視界は靴底の模様で占められ、後頭部の痛みがじんじんと目に染みてくる。

「何だよ、こいつ。泣いてんぜ？」

「キモいんだよ」

左右から靴が僕の身体中を踏みつける。

こつこつ時抵抗しても無駄だと、僕はよくわかっている。

痛いし苦しいけど、我慢していればすぐに終わる。

僕が全身から力を抜いた時、よく通る高い声が聞こえる。

「あなたたち何してんのよ！」

僕の額を踏みつけていた足が離れる。

涙で視界は滲んでいたけど、誰かが僕の横にひざまずくのはわかった。

紺のスカートから見える白い膝からすると女子らしい。

それにこの声には聞き覚えがある。

「さ、桜木……さん？」

喉をやられたためかすれた声しか出ない。

それでも優しく背中を支えられて上体を起こすと、それはやっぱり桜木風花だった。

「大丈夫？」

心底心配そうに僕を見つめる。

僕がゆっくり頷くと、彼女はすっと立ち上がる。

「何があったのかはわかんないけど、これはいじめよ！　あたしは絶対に許さない！」

桜木さんは僕に背中を向けて立っているのでその表情はわからない。でも声音からして、あの大きな目をキッとつり上げて怒ってるんだなってことは想像できる。

僕はもそもそと学用品を拾い集め、机と椅子を直して鞆を背負い直す。

「今度こういうことしたら、あたしが相手になってやるわ！　いい！？」

周囲の男子生徒たちはバツが悪そうにしている。

泣いていた女子とその友人はぽかんとした表情で桜木さんを見ている。

「行こ！」

桜木さんは僕の腕をつかんで教室から出ていく。

「おい、あの女だれだよ……」

教室を出る時、男子生徒たちがこそこそと話しているのが耳に入った。

3 光のプリリユード

「大丈夫？」

学校からの帰り道、桜木さんは心配そうに僕の顔を覗き込む。

僕は黙って頷く。

心配そうに僕の顔を見る大きく綺麗な瞳が、きよろきよろと動く。すると瞳の動きが僕の口元で止まる。

「あ、血が出てる」

桜木さんは肩にかけてサブバックをこそこそと探り始める。

口元に触れると鋭い痛みが走り、指先に赤い血がつく。

「はい、絆創膏」

桜木さんはかわいいキャラクターがプリントされた、ピンク色の絆創膏を差し出す。

「あ、ありがとう……」

僕は桜木さんの視線を避けながら、絆創膏を受け取る。

袋から出して貼ろうとするが、傷の場所が自分では見えないためうまく貼れない。

「貸して。貼ってあげる」

桜木さんは有無を言わず僕から絆創膏を取り上げると、下から覗き込むようにして傷に貼ってくれる。

道端で女の子にこんなことをしてもらうことが恥ずかしくて、僕は通行人の視線を避けてうつむいてしまう。

「はい、これでオツケー！」

桜木さんはまぶしいくらいの明るい笑顔で手をぱんぱんと払う。

僕の手から絆創膏の包み紙をひったくってポケットに入れる桜木さんに、僕はかねてからの疑問を口にする。

「どっして……」

「ん？」

「どうして僕なんかをかばってくれるの?」

桜木さんは何も言わず、真剣な表情で見つめている。

「僕なんかに構ってると、桜木さんもいじめられちゃうよ? 僕は慣れてるから大丈夫」

じっと僕を見つめていた桜木さんは、ふうつとため息をつく。

「あたしも聞いていい?」

「えっ?」

「どうして我慢するの?」

「え……」

僕は何も言えなくなってしまふ。

僕は人が嫌いだ。

集団が嫌いだ。

友情なんて信じないし、誰かに感じたこともない。

普通は何か悩み事があれば親や友達に相談するんだろうけど、僕にはそんな人は一人もない。

だったら自分で我慢するしかないじゃないか。

彼らが僕をいじめる気持ちはよくわかる。

僕は性格が暗いし、人付き合いもうまくできない。

両親に愛情を感じたこともなかったし、家族の温もりも知らない。

勉強もできないし、他人に尊敬されるような才能もない。

そんな僕が今こうやって生きているのはただの惰性に過ぎない。

「死んでない」から消去法で残った選択肢が「生きている」だけに過ぎないんだ。

何も言わず黙り込んでしまった僕に苛立つ様子も見せず、桜木さんは歩き始める。

僕もとぼとぼとついて行く。

「あたしは希望くんと友達になりたいと思ってるわよ」

胸が締め付けられるような感覚。

あまりにもまぶしすぎる笑顔と言葉。

でも僕にはそれを受け止める資格はない。

そんな人間じゃない。

僕は“死んでいない”だけの人間なんだ。

「僕は……」

急に立ち止まった僕に、桜木さんは心配そうな顔で振り返る。

『今度こういうことしたら、あたしが相手になってやるわ!』

今日の前に立っている女の子は僕のためにあんなことを言ってくれた。

それが僕の心に重くのしかかる。

桜木さんの優しさが辛い。

「じゅめん!」

僕は桜木さんから視線を外して走り出す。

「あつ！ ちょ……」

桜木さんの声が後ろから聞こえたが、僕はそれを振り払うように走り続ける。

まるで怖いものから逃げるように必死で。

希望の小さくなっていく後ろ姿を見ながら、風花はため息をつく。

「なかなか手強いわね。しょうがない。“彼”に助けてもらおうしかないか」

そのつぶやきは風に舞い上がって、誰にも聞かれることはなかった。

翌日の放課後、希望は風花に呼び出された。

クラスみんなは昨日の出来事など何もなかったかのように過ごしていた。

希望の存在は完璧に無視された。

嫌がらせはされないが、話しかけもされない。

まさに空気のようにその存在を無視されている。

希望の給食は用意されることはなかったし、プリントも回されない。

希望はすべて自分で自分のことをした。

担任は何も気づいていないようだ。

「そんなもんだろっな」

希望は最初から担任や教師は当てにしていない。

教師や学校という存在は、今希望がクラスの生徒たちから受けているのと同じように、“あってないようなもの”なのだ。

「希望くん！」

放課後、帰り支度をしていると桜木さんが教室の入り口に現れる。

昨日あんな態度を取ってしまった僕は、気まずくて彼女の顔を見る
ことができない。

「ちょっと付き合って」

桜木さんは僕の返事などお構いなしに、腕をぐいぐいと引いていく。

僕はあわてて鞆を背負い、サブバックを手に取る。

「ど、どこ行くの？」

「いいとこ」

桜木さんはバッグも何も持っていない。

部活や下校する生徒の流れに逆らって、桜木さんは特別教室棟に僕を連れて行く。

まさか人気のないところに連れ出して、僕を殺す気ではないだろう。

僕は桜木さんに引かれるまま素直について行く。

すると一つのドアの前で立ち止まる。

【国語科準備室】

ここは国語の授業で使う道具が置いてあるところらしい。

並びには【社会科準備室】や【視聴覚室】がある。

「しっつれいしま〜す!」

桜木さんは元気よく挨拶をしながら、ドアを開ける。

中は普通教室の半分ぐらいの大きさの部屋で、左右の棚には書写用の水黒板や作文の授業で使う小さめの黒板などがきちんと積み重ねられている。

奥には教室と同じような窓があつて、窓際に長身の男の先生が立っている。

「いらっしゃい」

優しそうな声でこちらを微笑んで見ているのは、どうみてもまだ二十代か三十代前半の若い青年教師だ。

さらさらとした髪が流れ、黒縁の眼鏡にかかる。

切れ長の目と筋の通った鼻はいわゆる“イケメン”の部類に十分入るだろう。

薄い唇は柔らかい微笑を作り出し、細い顎には脂肪や無精ひげは一切無縁に見える。

身長は180cm近いだろうか。

青いスーツをその瘦身にまとい、エンジ色のネクタイが見た目の若

さ以上に落ち着いた雰囲気を作り出している。

教師というより、芸能人かモデルといった感じに見える。

「せんせ！ この子があたしの言った大河希望くん」

「こ、こんにちは」

僕はその秀麗な顔から目を離せずに、変なお辞儀になってしまふ。

「はい、こんにちは。ぼくは神山光輝^{カミヤマ コウキ}。この学校で国語を教えている臨時教師だよ」

「臨時教師……」

僕はこの学校に転校してきてから、この先生を見たことはない。

もつともこの学校の先生を全員知っているわけではなかったが。

それに全校集会や行事にすべての先生が揃うことはないし、臨時教師だったら必ず毎日学校に来ているとも限らない。

ましてや担当している学年が違えば、めったに会うことはないだろう。

神山先生は僕と桜木さんにパイプ椅子を勧めてくれて、自分もキャ

スター付きの椅子に腰掛ける。

先生の机らしき事務机の上には、3年生のノートやワークが山積みになっている。

「きみのことは桜木くんから聞いているよ」

先生は眼鏡の奥から僕を見つめている。

その目は鋭いが、決して嫌な印象は受けない。

「えへっ！ いろいろ話しちゃった。ごめんね」

桜木さんはぺろつと小さな舌を出して頭を下げる。

「別に…… いいけど……」

いったい僕の何をこの先生に話したのだろうか。

性格の暗いヤツ？

いじめを受けても反抗さえできない情けないヤツとか？

僕は探るように神山先生を見る。

先生は僕の視線を柔らかく受け止める。

その目を見ていると何となく安心する気がする。

「あのね？ 希望くん。あなたに何があったのかはだいたい噂で知ってるわ。でもだからといってあなたが卑屈になったり、臆病になる必要はどこにもないのよ」

桜木さんは真剣な表情で話している。

彼女の言いたいことはわかるけど、いったい彼女に僕の何がわかるというのだろう。

それにこの先生は確かに優しくそうで頼りにもなりそうだけれど、僕はだれかに助けてもらいたいわけじゃない。

誰にも構ってほしくないだけだ。

一人にしておいてほしい。

「きみのお父さんは今何をしてらっしゃるんだい？」

突然神山先生が問いかけてくる。

僕が驚いて顔を上げると、先生は優しく微笑んでいる。

「わかりません…… 知りたくもありません」

「じゃお母さんは？」

突き放すように答えても、神山先生は気分を害した風もなくさらに問いかける。

「母は……」

『希望ごめんね！ ごめんね！』

涙を流し、謝りながら僕を殴り続ける母。

『希望、お母さんはあなたのことが大好きなのよ』

僕を笑顔で抱きしめながら包丁を振りかざす母。

「きっと前の家にまだいます。パートでスーパーのレジをやっていたので……」

「ちょっと突っ込んだことを聞いてもいいかな？」

神山先生の眼鏡の奥の切れ長の目がきらりと光る。

「は、はい……」

「あたし席を外しましょうか？」

桜木さんが立ち上がる。

僕はなぜか慌てて首を振ってしまふ。

「べ、別に桜木さんに聞かれてもいいよ。こ、ここにいて……」

そう言うと桜木さんは一瞬その大きな目を見開くが、すぐに頷いて微笑みながら椅子に座る。

「うん。きみがそう言うならこの子にはここにいてもらおう。でも桜木くん、ここで聞いたことはすべてオフレコで頼むよ」

「りょーかいです」

桜木さんはかわいらしく敬礼する。

その様子に目を細めていた神山先生は、まじめな顔に戻って僕に向き直る。

「まず、きみのご両親の離婚だが」

桜木さんがごくりと喉を鳴らす。

「お父さんの借金が原因と聞いたがそれは本当かい？」

「はい」

僕は正直に頷く。

僕は不思議な感覚だった。

さつき初めて会ったばかりのこの先生に、僕は完全に信頼感を持ってしまっている。

こんなことは初めてだった。

興味本位に僕の境遇を聞いてくる同級生や大人たちはいたが、神山先生はそんな感じはまったくくない。

「人のいい父でした。同じ会社の友人にギャンブル好きな人がいて、その人の借金を肩代わりしてしまったんです」

「連帯保証人か……」

神山先生がつぶやく。

そう、確かに父と母はそんな単語を口にしていた。

「それで父に愛想を尽かした母は、離婚して実家に戻りました。それが前の学校です」

「お母さんの様子がおかしくなったのはその頃からかい？」

僕はまた素直に頷く。

今までならこんな話をするだけで僕は胸が苦しくなっていた。

そして吐いた。

父や母の顔を思い浮かべるだけで嘔吐していた。

でもなぜか神山先生に父や母のことを話せば話すほど気持ちが楽になっっていく。

こんなことは今までで初めての気持ちだった。

「母は…… 僕を憎んでいました。母は僕を殴り、傷つけました。きっと僕に父の姿を重ねていたのでしょう」

「ふむ……」

神山先生は顎に手を当てて、何か考え事を始める。

僕の口は勝手に動く。

もう自分の意志では止められない。

「母は僕を殴り続け、意識がなくなると優しくお風呂に入れてくれました。そして意識が戻ると今度は刃物で僕を斬りつけました。何度も何度も。カーペットが真っ赤になって、身体中が熱くなったり冷たくなったりして僕はまた意識を失いました。気がつくと病院のベッドの上です。そして治るとまた母は僕を殴ります。一度は頭でガラスを割られました。」

僕は前髪をかき上げる。

額には真横に3cmほどの縫い跡がある。

桜木さんが横で息をのむのがわかる。

「そしてとうとう病院で母の僕に対する暴力がばれました。僕はそれまでだれにも言いませんでした。黙っていたらすぐに終わるからです。我慢していれば痛くても、辛くてもいつか終わるからです。もし誰かに言えばききともしっかりとひどい目に遭わされる。それなら僕が我慢していればすべて丸く収まるんです」

「もういいよ！ 希望くん！」

僕の頭が柔らかくていい匂いに包まれる。

桜木さんが僕の頭を抱きしめていた。

まるで堰を切って奔流のように流れ出した僕の感情が、優しく堰き止められる。

そこで初めて僕は気づいた。

僕は涙を流していた。

幾筋も頬に涙が流れ、僕の学生服にぼたぼたとシミができていく。

僕は涙がこんなに温かいものだと思っていた。

僕にとって涙はもっと冷たくて情けないものだった。

「お母さんは裁判所の通達できみから離されたんだね？」

僕の頭の上で桜木さんのすすり泣く声が聞こえる。

神山先生は静かに、落ち着いた口調で僕に問いかける。

「はい…… 本当は僕は施設に送られる予定でした。でも母の兄夫婦が、僕が就職するまでは面倒をみると言って…… この学校に転

校してきました」

僕の様子が落ち着いたとわかったためか、桜木さんは自分の椅子に戻る。

でもその頬は濡れたままだ。

「いじめは辛かったかい？」

神山先生の言葉は、まるで遠くから響いてくる教会の鐘の音のようだ。

僕の心の傷を一つ一つ癒してくれる。

どんな絆創膏でも治すことのできなかつた僕の傷を一つ一つ丁寧に治してくれる。

僕は静かに首を横に振る。

「身体の痛みは時間が経てば治ります。彼らは僕のような存在を認めたくないだけで、それはたぶん自然な感情なんだと思います」

何か言いたそうにする桜木さんを、神山先生は手で制する。

桜木さんは一瞬神山先生を見つめて、諦めたようにため息をつく。

「つまりきみはいじめに対して戦おうという気はないということだね」

「はい」

僕は神山先生を見つめる。

その目は僕を見ているというよりも、僕の目を通して僕の心の奥を見通しているような気がする。

「わかった」

「せんせ！」

神山先生は桜木さんの抗議に何も応えず、机の上から原稿用紙を何枚か取り上げる。

「本人がいいと言っていているのだから、ぼくにはどうしようもないさ。その代わりぼくはきみのことをもっと知りたいと思ったよ。よければなんだが……」

神山先生は僕に原稿用紙の束をを差し出す。

桜木さんは恨めしそうな目で神山先生を見つめている。

「何でも好きなことを書いてほしいんだ。読むのはぼくだけだ。きみが嫌だったら桜木くんにも見せない。今までだれにも言えなかつたきみの本当の気持ちここに書いてきてくれないか？」

神山先生の細くて白い指が真っ白な原稿用紙を掴んでいる。

僕は無意識のうちにそれを受け取っていた。

「ええ〜！？ あたしも読みたい！ 希望くん！ いいでしょ？ ね？」

「う、ううん、どうしようかな…… まだ書くと決めたわけじゃないし……」

そう言いながらも僕はもう心の中では決めていた。

この先生に自分の想いをすべてぶつけてみよう。

そうすれば何かが変わるかもしれない。

僕が“死ななくてもいい”理由が見つかるかもしれない。

まだしつこく「ね？ ね？」とまとわりつく桜木さんに曖昧に応えながら、僕は国語科準備室を出る。

桜木さんはここに鞆やバッグを置いてから僕を呼びに来たらしい。壁際に置いてあった鞆やサブバックを急いで担いで、僕のあとをついてくる。

「せんせってあつたかいでしょ？」

「うん」

夕暮れの迫るオレンジ色の空の下、桜木さんといっしょに歩きながら僕は気づいた。

僕は下を向いて歩いていない。

いつも視界に収めていた自分のつま先がない。

その代わり視界には桜木さんの笑顔と、いつもよりまぶしい景色が広がっていた。

4 光のコンチェルト

その日から僕は何かに取り憑かれたように書き続けた。

母にされたこと、今までできてきたいじめの数々、人について、生きることで死ぬこと。

神山先生はいつも放課後僕を待っていて、熱心に僕の書いたものを読んでくれた。

風花には恥ずかしくて見せてはいない。

神山先生も僕がいいと言うまで風花には見せはしなかったみたいだ。でも彼女だけを仲間外れにしているような気がして、何だかかわいそうになってくる。

僕の書き続けた原稿用紙が10枚を突破した一週間後の放課後、僕は委員会の仕事で遅れて国語科準備室へやってきた風花にも見せることにする。

「ええっ！　ほんと！？　あたしも見ていいの！？」

風花は目を輝かせる。

いつもは僕の書いた内容について神山先生が僕に2、3質問をする

のを、ただ黙って聞いているだけだった。

「ありがとうー！」

風花は両手で大事そうに僕の原稿用紙の束を神山先生から受け取って、真剣に読み始める。

時々涙をこぼしながら、途中で止まることなくすべて読み終える。

「希望くん、辛かったね」

風花は原稿用紙を大切そうに神山先生に返し、僕の手を握りしめてくれる。

僕は風花の手の温もりに包まれて、何だか無性に恥ずかしくなってしまう。

神山先生に初めて会ってから、風花は毎日僕のところへ顔を出すようになった。

基本的に放課後神山先生のところに行つて、途中までいっしょに帰るだけだ。

それでも僕にとっては信じられないくらい学校というところが楽しく感じられるようになった。

たった一人でも信じることでできる友人がいるということが、こんなにも僕の心を温かくするものだとは考えもしなかった。

お陰で最近『桜木さん』ではなく『風花』と呼べるようになった。風花もその方が嬉しいみたいだった。

神山先生は僕のめっちゃくちゃな文にも関わらず、すべてそのまま受け入れてくれる。

僕の暗い、ひねくれた考えに対しても決して否定したり理屈でお説教したりしない。

僕はあるまの自分の書き連ね、神山先生はそれを丸ごと受け入れてくれる。

ただその繰り返しのうちに、それだけで僕の心は温かく満たされていく。

「ね、せんせ？ あたし思ったんだけど……」

桜木さんが僕の原稿を指さす。

「希望くんって字すごく上手じゃないですか？」

「うん。ぼくもそれは感じていた。希望くん、きみ間違いなく才能あるよ」

「ええ？　そうですか？」

確かに僕は昔から何故か、字だけは上手だと褒められることが多かった。

まだ両親が揃っていたころは、書道展で入賞したこともある。

「そうよ！　何かに応募してみたら？　入賞するかもよ！」

「ええ〜！？　そんなの無理だよ」

何気ない会話。

何の裏も奥もない他愛のない会話。

たぶん他の人たちには何の感慨もなく、日常どこにでも転がっているもの。

それが僕には決して手の届かないところにある宝石のように感じていた。

それが今こうやって僕の手にある。

それだけで僕は過去を忘れ、前を向いて生きていけるような気がする。

「そう言えばそろそろ県の書き初め展の募集が始まるな」

神山先生は引き出しを開け、一枚のプリントを取り出す。

確かに来週から応募受付が始まるようだ。

「せ、先生までそんな！ 風花がふざけて言ってるだけですよ！」

「せっかくなら挑戦してみたらいいんじゃないかな？ どうせうちの学校は希望者しか応募しないし、誰かに無理矢理出品させるくらいならきみに出品してほしいな」

神山先生はビニール袋に入った細長い書きぞめ用紙を僕に差し出す。

「『理想の実現』……」

朱書きで注意が印刷してある、用紙よりも一回り小さいお手本を取り出す。

僕はその言葉を見た瞬間、どうしても書いてみたくなる。

「いい言葉じゃないか。今のきみにぴったりだ」

「今の僕……」

理想なんてない。

ないものを実現なんてできるわけない。

でもその言葉が僕の胸に響いてくる。風花や神山先生の言葉みたいに。

「僕…… やってみます」

「わあ！ 希望くん！ がんばって！」

「う、うん」

いきなり風花が抱きついてくるものだから、僕は顔から火が出るかと思った。

でも何だか、あつたかくて嬉しくて。

僕のこと誰かが喜んでくれるっていいな。

素直にそう思える自分がいた。

その日から毎日、僕は学校が終わるとすぐに家に帰って書きぞめの練習をした。

書いてみると見た感じ以上に難しくって、僕は何度も何度も練習する。

とりあえず前の日に書いたやつの中で一番いいできのものは、次の日に神山先生のところへ持って行って見てもらう。

神山先生はその度に真剣に、そして熱心に指導してくれた。

「うん。この点画はもっと筆圧を強くした方がいいな」

「でもそれだとひらがなのバランスが悪くなるんです」

「だったらこの入りをもう少し下からにすれば」

「せんせい見て見てえ！ あたしも書いたあ！」

僕と神山先生が話していると、さっきから机の脇で何かをしていた風花が書きぞめを持ち上げる。

『理想の実現』と書いたらしいけど、下にスペースがなくなっちゃったようで、『現』の字が完全につぶれてしまっている。

「ぶっ！」

「ああ〜！ 希望くん今笑ったあ！」

「いっ、いっめ？」

風花がふてくされて鼻を擦ると、ほっぺたに墨がひげのようについてしまう。

「あはっ！ あはははは……」

僕と神山先生は声を合わせて笑う。

「もうっ！ 希望くんもせんせもムカつく！」

いつの間にか僕はもう、自然に笑うことができるようになっていた。そしてついに作品を発送する日になり、僕は一つの作品を書き上げた。

「どうですか？」

神山先生は僕の作品を床に置いて、顎に手を当ててじっくりと眺める。

いつもだったらすぐにいろいろ言ってくれるのに、なかなか口を開かない。

国語科準備室の空気が緊張のため張りつめる。

いつもはうるさい風花も、緊張した表情で固唾を呑んでいる。

「うん。すごくいい。感動したよ」

「うわぁ！ 希望くん！ よかったねえ！」

風花が飛び上がって喜ぶ。

神山先生は大切そうに僕の作品を持ち上げ、壁にマグネットで貼り付ける。

『理想の実現』…… 僕はもう実現してるのかもしれない。

僕には神山先生と風花がいる。

何でも話を聞いてくれる人がいる。

いつしよに喜んでくれたり悲しんでくれたりする友達がいる。

それだけで僕の理想は実現しているのかもしれない。

冬休みが終わり、新しい年が始まった。

おじさんとおばさんは、車で1時間ほどのところにある有名な神社に僕を初詣に連れて行ってくれた。

おじさんとおばさんにはお子さんがいない。

だから僕のことを本当の子どものように見てくれる。

来たばかりのころは気を遣ってばかりでなかなか話もできなかったけれど、今はだいぶ話ができるようになった。

三が日が終わっておじさんとおばさんの仕事が始まった平日、突然母が現れた。

「希望……」

宅急便か何かかと思って開けた玄関扉の向こうに、懐かしい母の姿があった。

小さいころは恐ろしく、世の中のすべてが母だった。

その母は僕の前で小さな肩を震わし、涙を流している。

「な…… 何しに来たの？」

僕は自分でもびっくりするほど冷たい声で話す。

きつと顔は無表情だろう。

顔中の筋肉が硬直したみたいに固まって、びくりもしない。

「あなたと…… またいつしょに暮らしたいと思って……」

「何を言ってるんだよ！」

僕は吐き気がする。

胃の中の物が逆流してきて、喉の奥がすっぱくなる。

「さ、裁判所で言われたんだろ！？ 僕に近づいちゃいけないって
！」

「そ、それはそうだけど……」

母はそのことがわかってから、おじさんとおばさんのいないこの時期に、この時間に来たんだ。

もしかしたら近くて見てて、おじさんとおばさんが出かけるのを確認していたのかもしれない。

「帰れよ！ 帰ってよ！ 僕、お母さんの顔なんか見たくないんだ！ 僕は元気でやってるよ！ 毎日楽しく学校に通ってるよ！ 友達もできた。信頼できる先生もいる。僕はもう大丈夫なんだよ！ お母さんなんかいららないんだよ！」

僕はそこまで一気に叫び、お母さんを外に押し出す。

音高く玄関のドアを閉めると、その場に座り込む。

「希望…… じゅめんね……」

ドアの向こうで小さくお母さんの泣き声が聞こえたかと思うと、小さな足音が遠ざかっていく。

押しのけたお母さんの身体はとても小さくて、軽かった。

それが僕には無性に腹立たしかった。

新学期が始まってすぐの昼休み、僕は校長室に呼ばれた。

滅多に入ることのない部屋なので、とても緊張する。

「失礼します」

ノックをして中に入ると、担任の先生と神山先生が校長先生の前に立っている。

黒檀製の高そうな机の向こうでは、厳しい表情の校長先生が電話中だ。

僕は壁際に並ぶ何本かの優勝旗の横で、昔の校長先生の写真を眺めて待っていた。

「希望くん」

神山先生の優しい笑顔が僕を呼ぶ。

僕はそろそろと担任の先生に促されて校長先生の前に立つ。

校長先生は「はい、ありがとうございます」と電話の相手にお辞儀して受話器を置く。

「大河くん」

校長先生が立ち上がって僕の方へ手を出す。

いつもは気難しく怖い顔をしている校長先生が満面の笑顔だ。

「おめでとう。きみの作品が書きぞめ大賞に選ばれた」

「え？」

僕は何を言われたのかわからない。

思わず神山先生の顔を見る。

「希望くん。きみの作品が約5万点の作品の中で一番いい賞に選ばれたんだよ。おめでとう」

「ええええっ！」

若いころは不良学生を相手に武闘派で鳴らしていたという校長先生のゴツイ手が、僕をぶんぶん振り回す。

「我が校始まって以来の快挙だ！ 大河くん！ よくやってくれた！」

別に学校のためにがんばったわけじゃないけど、喜んでもらえるのは素直に嬉しい。

それがどんなことでも。

緑が丘中学は過去、運動部での県優勝経験はあったが文化面での活躍はあまり目立ったものがなかった。

書きぞめ大賞という賞がどれだけすごいのかはわからないけれど、校長先生や担任の先生の興奮した様子で何となくすごいことなんだなということとは感じられる。

校長先生からは今度の全校集会で表彰するということ。

今日の放課後地元新聞とラジオの取材が来るということ。

明日にはローカルテレビ局がインタビューに来ること。

そしてこの学校出身の国会議員から喜びと賞賛の連絡を受けたなどの話がある。

最後のはどうでもよかったが、取材とかは緊張する。

校長先生の話によれば担任の先生がついていてくれるみたいだったが、僕は神山先生にいて欲しかった。

「ぼくはきみの担当ではないし、学年も違う。担任の佐々木先生にお願いするよ」

そういつて神山先生はもう一度「おめでとう」と握手をして校長室を出ていった。

教室へ戻るとすでにその情報はみんなにも伝わっていたようだった。

何人かが僕のところに来て「すごいね」とか「前から字上手いなって思ってた」などと声をかけられる。

以前とは違う理由でしどろもどろに受け答えしながら、結局放課後までその状態が続いた。

放課後地元新聞とラジオの取材を終え、国語科準備室に行く。

中では神山先生と風花が待っていてくれた。

「希望くんおめでとう!」

「ありがとう」

やっぱり風花に言われるのが一番嬉しい。

僕がこんなすごい賞をとれたことは、間違いなく風花と神山先生のお陰だ。

きちんとお礼を言わなきゃと思うんだけど、何となく恥ずかしくて言い出せない。

すると神山先生に予想外なことを聞かれる。

「希望くん。最近何かあったんじゃないのかい?」

神山先生の顔は笑顔だけど、その言葉に込められた深い意味に僕は気づく。

「母に…… 会いました」

「お母さん……」

風花がつぶやく。

「いきなりやって来て、またいつしよに暮らそうって言われました」

「希望くん……」

風花が心配そうな顔で僕を見る。

その時僕はきつと怖い顔をしていたんだと思う。

神山先生は僕の考えがわかっているみたいだ。

「希望くん。きみは書きぞめを通して変わった。強くなった。以前のきみとは違う。お母さんの話を聞いてみてもいいんじゃないかな」

僕は確かに変わったと思う。

それに合わせて周りも変わった。

母がまだ精神的に不安定でも、以前のようにびくびくせず耐えられる気はする。

でもだからといって母が僕にしたことを許せるわけではない。

「いいんです。僕は今の方がずっといい。母はきつとまた僕に暴力を振るいます。僕は今の幸せを崩したくない」

「希望くん……」

風花の悲しそうな顔を見ているのが辛くなった僕は、準備室を出る。

そうだ。

今のままが一番いい。

それが僕の『理想の実現』なんだから。

翌日ローカルテレビの取材を校長室で受けた。

テレビカメラやライトが物々しくって、僕はしどろもどろになりながらも何とか受け答えはできた。

今日の夕方に放映されるということで、神山先生と風花に知らせようとして教室に戻ると風花が現れた。

「希望くん。いつしよに帰ろう」

「え？ 神山先生のところへは行かないの？」

風花は力なく笑う。

何となくその笑顔が気になる。

それでも周囲に他の人がいるためか、風花は理由を話そうとしない。

僕は仕方なく風花について昇降口を出た。

「せんせーね？ ちょっと今忙しいみたい」

「ふうん」

臨時教師なのに何が忙しいんだろう。

そっか、3年生担当だから進路とかで忙しいんだな。

勝手に僕はそう解釈することにした。

風花もそれ以上は何も言っではこなかった。

毎日会っていた神山先生の笑顔が見られなくなるととても不安になる。

でも僕の横で風花が笑ってくれていれば、僕は元気が出る。

神山先生には安心をもらって、風花には元気をもらおう。

周囲が変わって僕はいじめられなくなったけれども、やっぱり二人は僕にとってなくてはならない特別な存在に変わりはなかった。

数日間は穏やかに過ぎていった。

神山先生は相変わらず忙しいとかで、毎日風花と下校した。

ところがある日、また僕の周囲に変化が起こる。

それは担任の佐々木先生によって告げられた。

「希望、ちよつと校長室に来てくれ」

帰りの学活が終わるとすぐに、佐々木先生が僕に声をかける。

風花はまだ現れていない。

何だろうと思って佐々木先生といっしょに校長室へ行くと、校長先生は応接セットのソファに座って僕を待っていた。

「大河くんよく来てくれた。まあ座りなさい」

「失礼します」

僕の向かい側には佐々木先生が座る。

真ん中のお誕生席に校長先生がにこにこしながら座っている。

「実はね、市の方から君に作品依頼が来たんだよ」

「作品依頼ってなんですか？」

校長先生は佐々木先生にうなずく。

佐々木先生は立ち上がり、校長室の壁に掛けてある一枚の掛け軸を外して持つてくる。

「毎年この時期に、うちの市では書道展を開催している。各学校の優秀作品を展示するんだ」

「はあ」

それは何となく聞いたことがある。

なんとか賞とかいって新聞にも掲載される。

かなり歴史の古い書道展らしく、出品するだけで高校の推薦がもらえたりするらしい。

「そこで君には条幅での参加をお願いしたいんだ」

「じょうぶく」って何ですか？」

「これだよ」

佐々木先生が掛け軸を持ち上げる。

それは僕よりずっと身長の高い佐々木先生でも、完全に持ち上げることができないくらい大きくて長い。

「こ、こんな大きいのも、無理です!」

「なあに、君ならできるさ。詳しい指導は神山先生にお願いしておいた。どうやら君は彼を気に入っているようだからね」

その言い方が何となく神山先生をバカにしたようにも感じられ、少しむっとした。

でも神山先生がついてくれるなら何とかかなりそうな気がする。

そう思っ僕は引き受けることにした。

校長室を出て国語科準備室へ行くと、神山先生と風花が僕を待っていてくれた。

「先生、何か久しぶりですね」

「ははっ、そうだね」

やっぱり神山先生に会つと安心する。

風花は僕のクラスの人に僕が校長先生に呼ばれたことを聞いたらしい。

「で、話ってなんだったの？」

僕は風花に、校長先生に手渡された何も書かれていない巻物のような条幅紙を見せる。

「市の書道展に出品するよう言われました」

「市の書道展？」

風花はきよとんとする。

「ほう。県の書きぞめ大賞受賞ともなれば、市教委からお誘いが来るんだね」

「せんせ、それってすごいのか？」

風花は条幅紙をひねくり回している。

「すごいさ。うちの市は中国の撫順市と姉妹都市になっていて、最優秀賞の撫順市長賞だと中国に書道留学できるらしいね」

「へえ〜！　すごい！　希望くん、狙ってみたら？」

風花は目を輝かせている。

「む、無理だよ。書きぞめでもたいへんだったのに、こんな大きい……」

「まあ、専門の先生に弟子入りしてる生徒も出品するみたいだし、何より大事なのは“何を”書くかだしね」

お手本のある県の書きぞめ展とは違って、市の書道展は課題は自由だ。

県の書きぞめ展は希望者が出品するので、実力のある生徒で参加しなかった人もいる。

しかしこの書道展は県書きぞめ展よりも進路に有利ということであくさんの実力者も出品してくる。

中国留学も参加理由の一つになるだろう。

難しさや規模では県よりも高いらしい。

「とにかく出品するって決めたからにはがんばって書きたいと思います」

僕はまず神山先生が言ったように、書く言葉を考えることにする。

作品提出は2週間後。

すぐにでも練習に取りかからないと間に合わなくなってしまう。

「練習用の条幅や道具は、学校で用意してくれるそうだ。とにかく何を書くか決めないとね」

「はい」

「あたしも考える〜！」

風花が元気よく手を挙げる。

僕は帰りに図書室にでも寄って、四字熟語辞典でも借りていこうと思っただ。

それから僕は数日間、言葉を探したりしながら過ごした。

するとある日の授業中、佐々木先生が突然息を切らせて教室へ入っ

て来る。

「希望！ ちょっと」

数学の授業中だったため、佐々木先生は担当の先生に一言断わる。

僕は周囲の訝しげな視線にさらされながら、教室の後ろのドアから廊下に出る。

「希望、落ち着けよ」

佐々木先生の方が落ち着いてくださいよと思ったが、僕は口には出さずに黙って頷く。

「お父さんが危篤状態だそうだ。今お母さんから連絡が入った」

5 光と風のロンド

僕は衝撃で頭が真っ白になってしまっ。

何？

どういこと？

お父さん？

おじさんじゃなくて？

お母さん？

僕はどうすればいい？

次々と頭の中にクエスチョンマークが浮かんでくる。

「とにかくすぐに家に帰れ。おじさんとおばさんにも連絡は行つて
と思うが、念のため学校からも連絡してみる」

何年も音沙汰なかった父がなぜ危篤状態などになっているのだから。
か。

そして離婚したはずの母が、何で父の危急を知らせてくるのだろうか。

僕の頭の中は、何もわからないままぐるぐると疑問だけが渦巻く。

気が付くと僕は家に戻っていた。

誰もいないリビングには、静かに冬の陽射しが差し込んでいる。

カバンを下ろすと電話が鳴る。

「はい」

『希望？』

おじさんかおばさんかと思ったら母だった。

電話の向こうの母は泣いているようだ。

「お母さん？ いったい何がどうなってるの？」

鼻をすするような声が聞こえ、僕は息をのむ。

『詳しいことは後で話すけど、お母さんとお父さんはお互いに嫌いで離婚したわけじゃなかったのよ。お父さんは今でもあなたのことを心配してるわ。もちろんわたしも』

母はかなり気が動転しているようだ。

『お父さんはわたしたちに迷惑がかかるのを恐れて自分から離れていったのよ。借金を返したら迎えに来るつもりだったみたい。働いて働いてとうとう身体を壊してしまって…… うわごとであなただの名前を呼んでるわ。お願い、希望！ お父さんとお母さんを許して！ あなたに嫌われて、お父さんまでいなくなったらお母さんは……』

その後は泣き声で言葉は続かない。

とりあえず病院の名前と場所、病室だけは何とか聞き出して電話を切る。

僕は混乱して意味もなくリビングを歩き回る。

病院は東京だ。

とにかく今すぐにも行つて事情を知りたい。

すると外に車の停まる音がする。僕はすぐに靴を履いて外に出る。

「希望くん！」

神山先生と風花だった。

先生の運転する白い軽自動車の後部座席から、風花が身を乗り出し

て手を振っている。

「どうして二人が？」

「いいから乗って！ すぐにお父さんのところに行こう！」

めまぐるしく変化する状況に僕はまったくついていけない。

それでも神山先生と風花を見ると安心する。

僕が助手席に乗ると、車はすぐに走り出す。

「佐々木先生に話は聞いた。おじさんとおばさんには連絡が取れないらしい。きみのお母さんはたぶん二人には連絡していないと思うたから迎えに来た」

車はスピード違反をしながら、高速の入り口へ向かう。

「おじさんとおばさんに連絡を取っている間にも、きみのお父さんの具合が悪くなってしまいかもしれない。それで学校を抜け出してきたのさ」

「あたしもサボっちゃった」

「そんな…… 僕のために……」

神山先生の運転する軽自動車は東京へ向けてひた走る。

2時間も走れば着けるはずだ。

「希望くん。混乱しているだろうが、ぼくの話聞いてほしい」

神山先生は運転しながら話し始める。

「きみのお母さんはきみが憎くて暴力を振るっていたんじゃないかな
たんだ」

「え？」

神山先生の整った顔立ちの向こうでは、すごい勢いで景色が流れていく。

「代理ミュンヒハウゼン症候群…… っって知ってるかい？」

「だいいり…… それって病気ですか？」

風花が後部座席から顔を出してくる。

神山先生は前を向いたまま頷く。

「きみのお父さんは離婚をしてきみとお母さんに迷惑がかからないようにした。お母さんは自分を責めた。きみのお父さんが辛い思いをしているのに自分は何もできない…… ってね」

淡々と話す神山先生の横顔からは何の感情も読みとれない。

「お母さんはとても責任感のある方なんだね。それが仇となってしまった」

僕は押しのけた時の母の小さな身体を思い出す。

「代理ミュンヒハウゼン症候群とは、子どもを傷つけてそれを必死に治療することで母親としての満足を得るといって精神病だよ」

「そんな…… そんなのって……」

風花はぼろぼろと大粒の涙を流し始める。

「お母さんは母親として何かきみのためにしてあげたかった。それがきみを傷つける結果になってしまったんだ」

車内は軽自動車の高いエンジン音に満たされている。

まるで僕の心臓の音みたいだ。

包丁を振り上げる母。

涙を流しながら謝る母。

どっちがほんとなんだろうかと思ってた。

そしてどっちもほんとの母だと思った。

「先生は……」

「ん？」

「先生はどうしてそんなこと知ってるんですか？」

神山先生は一瞬僕の方を向いて、いつもの優しい微笑みを見せる。

「この間お母さんが来たときみに聞いた時から少し気になってね。いろいろ調べさせてもらったよ」

「もしかして最近忙しいって言ってたのはこのことだったんですか？」

僕の問いかけに神山先生は何も言わず微笑んでいる。

風花も知っていたようだ。

「希望くん、それでお父さんに会ったらどうする？」

「桜木くん」

神山先生の声は静かだが、その声には強い意志が感じられる。

「それは希望くんが考えることで、ぼくたちに口出しする権利はないよ」

「そっか…… そうですよね。希望くんごめんなさい。でもどんな結論を出そうと、あたしたちは希望くんの味方だからね」

神山先生と風花はその後何も話しかけてはこなかった。

僕も父と母の顔を思い浮かべ、とにかく間に合うことだけを祈っていた。

父が入院しているのは以前住んでいた家の近くの総合病院だった。

僕は懐かしさよりも嫌な思い出の方が多し街並みを眺めながら、ま

さかこんな形でまたここに来るなんて不思議な運命だと思う。

父は一般病室にいた。

一時は容態が悪化し、集中治療室に入っていたらしいが、今は小康状態を保っているらしい。

「希望……」

病室に入るなり、母が泣きながら近寄ってくる。

僕は一瞬身構えてしまいが、震える母の肩を見ると力が抜けていくのがわかる。

父は酸素吸入器をつけて目を閉じている。

眠っているようだ。

「希望、お父さんは過労で倒れたらしいわ。もともとそんなに身体は強い方ではなかったのに、寝る間も惜しんで肉体労働してたみたい」

数年ぶりに見る父の身体はびっくりするほど細い。

頬はげっそりと陰影をつけ、白髪交じりの髪はまだ四十代の働き盛りの年齢には見えない。

布団の上に置かれた枯れ枝のような腕には点滴の針が刺さり、管を通してレモン色の液体が透明なビニール袋の中でしたたり落ちていく。

「お母さん今治療を受けてるの」

母が僕に丸い見舞客用のイスを勧めてくれる。

僕は首を横に振って立ち尽くす。久しぶりに僕の両親が揃っている。

父に意識はなく、母は泣き崩れているけれども家族全員揃っていることに変わりはない。

「少しずつだけれど良くなってきてるのよ。お医者さんの話では、今年中には裁判所へ親権復帰の申請を出せるでしょうって」

きっと母はそれを励みに生きてきたのだろう。

以前の僕だったら決してそんな風には考えられなかったと思う。

そんなことを考えられる僕は、強くなったということなんだろうか。

「父さんは……」

母が赤い目を僕に向ける。

「父さんは僕やお母さんを大切に思ってくれてたのかな……」

「もちろんよ！」

母の顔は涙でぐしゃぐしゃだけど、その目には強い光が宿っている。

「大切に思ってるから、お父さんはわたしたちの前からいなくなつたのよ」

僕はその時初めて気がついた。

母は知っていたんだ。

父の本心を。

だからこそ自分自身を責めた。そして病気になってしまった。

傷ついていたのは僕だけじゃない。

みんな傷つき、もがき、苦しんでいたんだ。

「う……あ……」

父が目を覚まし、ぶるぶると震えながら手を上げている。

「あなた！」

母が父の手を握り締める。

父の細く開いた目には力はなかったけれど、その視線は間違いなく僕を捕らえている。

そしてそこに立っているのが僕だとわかったのが、父の目から一筋の涙がこぼれる。

「せ、先生呼んで来るわね！」

母が病室を飛び出していく。

僕はゆっくと父の手に自分の手を重ねる。

その手はかさかさに乾いていて皮膚は硬く……そして温かった。

「父さん」

僕はきちんとしゃべれてるのだろうか。

父は僕の声が聞こえているのだろうか。

父の目からは止めどなく涙があふれ、苦しそうだった表情は微笑みに変わっている。

僕も涙を止めることはできず、頬を熱い滴がいくつも流れ落ちていく。

父さん苦しかったね。

もう一人で傷つくのはやめようよ。

苦しむなら家族みんなで苦しもう。

僕に何ができるのかはわからないけれど、父さんの手を握ることができるよ。

「また…… 家族みんなで暮らそう」

父は僕の言ったことを理解したのかどうかはわからないけれど、涙を流しながら何度もうなずく。

僕は父の手を強く握りしめた。

「希望くん、お父さん大丈夫？」

病室を出ると風花がベンチから立ち上がって心配そうな顔をする。

「今お医者さんが来て様子を見てる。意識を取り戻したから峠は越したでしょうって。ゆっくり休んで栄養を摂れば、また元気になれるでしょうって」

「ほんと！ よかったあ！」

風花の顔がぱつと明るくなる。

「先生は？」

風花といっしょにいたはずの神山先生の姿が見当たらない。

「せんせは学校に電話してるよ。あ、来た」

神山先生が廊下を歩いてくる。

「やあ、希望くん。お父さんの具合はどうだい？」

「何とか持ち直せそうです」

「そりゃよかった。がんばって来たかいがあったね」

神山先生はにこにこしている。

「どづいつことですか？」

“来たかいがあった”なんて、僕は何もしていない。

父の容態が持ち直せたのはお医者さんの治療と父のがんばり、母の看護の結果だと思う。

「きみはまだ気づいてないようだね」

「何がですか？」

「きみは名前の通りご両親の“希望”なんだよ」

僕は自分の名前が嫌いだった。

“男のくせに女みたいな名前”とずっといじめられてたから。

でもそうじゃなかった。

「母に…… またいつしよに暮らそうと言われました。僕、はじめは絶対に嫌だったけど、またいつしよに暮らしてもいいかなって思えるようになりました」

「うんうん」

風花はまた泣いている。

この娘はどうしてこんなにも他人のために泣けるのだろう。

どうして僕なんかのために一生懸命になってくれるんだろう。

「あたしもがんばったかいがあるってもんだ！」

「なに調子のいいこと言ってるんだい？」

神山先生のつつこみでみんな笑う。

風花も僕も笑いながら涙を拭う。

この時僕は書道展で書く言葉を決めた。

絶対にこの言葉しかないって言葉を。

『光風動春』…… 僕のこの作品は市書道展最優秀賞に輝き、撫順

市長賞を獲得した。

僕の作品がでかでかと地方紙に掲載され、専門の先生のコメントが寄せられていた。

『この作品から感じられる躍動感、そして喜び、感謝の気持ちには感動しました。ただの記号である文字で、ここまで感情や想いを表現できる才能にはいたく感激しました。この作品が最高賞を受賞したのは誰もが認めるところでしょう』

神山光輝先生の『光』の一字と、桜木風花の『風』の一字を取って、僕なりに感謝の気持ちを表した。

もともとは『輝く光と心地よい風が春を引き入れてくる』という意味だが、人の心に転じて使われると『寛大な気持ちが幸福を運んでくる』という意味になる。

書道ではよく書かれる有名な言葉なのだが、今の僕にぴったりの気がした。

僕は父と母を許そうと思う。

寛大な心で。

そしてまた家族に暖かい春が来てほしいと願った。

父の容態は、僕がお見舞いをした日をきっかけにみるみるうちによくなり、来月には退院できるようだ。

いまだ溶けない雪が道路脇に目立つ3月、僕は成田空港へ向かっていた。

春の足音は確実に近づき、三寒四温で一雨ごとに暖かくなっていく。

今日から二週間、僕は中国へ書道留学をすることになっている。

「まさか希望にこんな才能があるなんてね」

空港までの道を母の軽自動車がゆっくりと進んでいる。

正式に僕の親権が認められ、母は僕といっしょに暮らし始めている。

本当は僕が母のところへ行くべきなんだろうけど、今の学校を転校したくなかったので母が僕のところへ来た。

おじさんとおばさんの計らいもあって仕事も見つかり、母と僕はアパートに引っ越した。

受賞してからの日々はめまぐるしく過ぎていき、神山先生や風花ともゆっくり話せる時間は取れなかった。

それでもクラスの友人たちが仲良くしてくれるので、僕はすっかり明るく人と話せるようになった。

母の病気はすっかりと落ち着き、以前とは別人のように優しい。

母の中で僕の存在はとても大きかったようだ。

僕が戻ってきたことで母は母親としての自信を取り戻し、父の帰りを心待ちにしている。

父が退院したら再婚の手続きをするみたいだ。

何もかもが怖いくらいに上手くいっている。

もしかしたらまた何かぎっかけて崩れてしまいかもしれない。

でも僕も両親も、今度は負けずに立ち向かっていけそうな気がする。

「希望くん！」

出発ロビーへと向かう途中、神山先生と風花が見送りのために僕を待ってくれていた。

「またサボったの？」

僕がいじわるに微笑むと、風花は「へへ〜ん」と勝ち誇ったように

腰に手を当て胸を反らす。

「今日は違うもんね。ちゃあんと校長先生に許可もらってきてるもん。ね、せんせ！」

神山先生は母に挨拶をしていたが、風花に聞かれ「ああ」といつもと変わらない優しい微笑みを向けてくれる。

「希望くん、きみは今までずっと苦しい思いをしてきた。これからはいっぱい幸せになるんだぞ」

神山先生は何だかもうこれっきり僕には会わないようなことを言う。

94

「先生のお陰です。書写だけでなく、今まで本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします」

何となく神山先生に釣られて、僕もそんな挨拶をしてしまう。

「希望くん、元気だね。あたしのこと忘れちゃダメだよ」

風花までそんなことを言う。

たった2週間で忘れるわけじゃないじゃないか。

「3年生になったら、風花と同じクラスになりたいな」

そう言った時、風花は一瞬泣き笑いのような顔になる。

でもそれは一瞬のことで、すぐにいつもの元気な笑顔に戻る。

「それって遠回しにコクってるう？」

「ばっ、ちがっ！」

焦って真っ赤になる僕を見てみんなが笑う。

母も口に手を当てて幸せそうに笑う。

そう、僕にとっての幸せはこれなんだ。

お金なんかなくったっていい。

成績はいい方がいいけど、何よりも心から笑い合える人たちがいる。

それが僕にとってかけがえのない幸せの宝物なんだ。

「いつてらっしゅーいー！」

母と僕は出発ロビーに向かう。

僕たちの姿が見えなくなるまで、神山先生と風花はずっと手を振って来ていた。

「いってきます」

僕は力強く応え、前を向いて歩き出す。

轟音を上げ旅客機が加速していく。

希望と母を乗せたジャンボジェット機が離陸していく。

空港の見送りデッキには、スーツを着た長身の端正な顔立ちをした男性と、セーラー服を着た明るい顔立ちの女の子が次第に高度を上げていく飛行機を見上げている。

「行っちゃったね」

「そうだね」

「これであたしたちの役目も終わりだね」

「そうだね」

「希望くん、もうあたしたちがいなくても大丈夫だよね」

男性は何も言わず、小さくなっていく飛行機を見ながらうなずく。

「みんなの記憶は消してきたかい？」

男性が空を見上げながら問いかける。

「うん。あとあたしたちのことを覚えてるのは希望くんと希望くんのお母さんだけだよ」

「そうか」

男性は一瞬目を細めると、その全身が光に包まれ始める。

「希望くんたちも、中国に着いたらあたしたちのことを忘れるようにしてある」

男性はまた静かにうなずく。

少女の身体も光が包み込み始める。

「ねえ、あたしたちのしてることって無駄じゃないのかな」

「無駄って？」

男性の顔はもう、まばゆい光の中に埋没してその表情は見えない。

「だって希望くんのような子は世界中にたくさんいるでしょ？ こんなことしてたって、この地上から悲しみが消えることなんてないと思う」

少女のツインテールもまばゆく白い光を放っている。

「そうだね…… でもこれから希望くんのような子を一人でも救えたら、それは決して無駄じゃないんじゃないかな。だからこそほくたちはまた同じことを繰り返す。何度も何度も。何十年も何百年も。終わることのない輪舞曲ロンドのように」

男性と少女の姿が完全に光に包み込まれたかと思うと、その中から白鳥のような大きな翼が二対広がる。

周囲の見送りをしている人間たちはまったく気づく様子はない。

大きな二対の美しい翼が羽ばたくと、その光はゆっくりと空へ向かって舞い上がる。

光の中からは美しい顔立ちの男性とかわいらしい少女の天使が姿を現す。

きらきらと光の粒子を舞い散らせながら、二人の天使は青く澄んだ空をどこまでも上っていく。

やがてその二つの光点は青い空に吸い込まれるように小さくなり消えていった。

『希望くん、元気でね。さようなら』

うとうととしていた希望がはっと目を覚ます。

慌てて周囲を見回すが、飛行機のエンジン音以外には何も聞こえず、寝ている母と、静かにそれぞれの時間を過ごす乗客しかいない。

「今、風花の声が聞こえたような気がしたけど……」

希望は首を傾げて窓を見る。

そこには見事なまでの雲海が広がっている。

僕が今こうしているのは以前の僕には想像もつかなかった。

でも今はこれが現実で、僕は今まで長い悪夢を見ていたような気がする。

そう思える自分がいる。

それは間違いなく二人のお陰だ。

僕は神山先生と風花のまぶしくて優しい笑顔を思い浮かべる。

「おみやげ、なに買っていきこうかな」

永遠に続く闇はない。

何かに躓いて倒れても、埃を払って立ち上がればいい。

自分は決して一人ではない。

信じよう。

未来を。

自分の可能性を。

眼下に広がる雲海の下には、あふれる光と優しい風が吹いているから。

【光と風の輪舞曲・ロンド】 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8949p/>

光と風の輪舞曲 ロンド

2011年6月3日00時40分発行